

会 議 ・ 視 察 報 告

建国60周年を迎え祝賀ムードの平壤

ERINA調査研究部研究主任 三村光弘

2008年9月6日～13日の日程で朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の平壤を訪問した。今回は、北朝鮮の学者との交流と北朝鮮の建国60周年を祝う各種行事への参加が主目的だった。

今回は大阪～瀋陽～平壤ルートでの訪問だった。9月6日に関西空港から乗った瀋陽行き全日空便は、航空会社の係員がチェックインの際に「今日は大変混んでいます」と告げるほどに瀋陽行きの客で一杯だった。瀋陽行きの乗客の最終目的地は、ほとんどが平壤だった。在日朝鮮人の訪朝団が機内で知り合いを探し、挨拶を交わす風景は、経済制裁下の日朝を往復するという緊張感はさほど感じられず、どちらかというと同窓会のそれであった。乗り換えで降りた瀋陽桃仙空港は、普段の静かな姿とは打って変わって、平壤行きの飛行機を待つ各地からの訪朝団でいっぱいだった。普段は50人乗りほどの小さな飛行機、ツボレフ134で運行されているが、この日は大型機イリュージン62での運行だった。機内には中国をはじめ日本、韓国、米国などから平壤を訪れる人でいっぱいだった。

平壤の順安空港に到着後、市内までの道は新しく舗装し直されている部分が多かった。市内に入ると、写真1のような祝賀ムードを盛り上げるためかさまざまな趣向を凝らした看板や旗が飾られていた。

祝賀行事の中では、9月8日に平壤体育館で開かれた「中央報告大会」や9日に金日成広場で行われた民間武力であ

る労農赤衛隊の行進と群衆集会とともに、マスゲーム「繁栄あれ、わが祖国」と「アリラン」が特に印象深かった。マスゲームは以前の「アリラン」のように、学生が主体のどちらかという堅めの印象を与えるものだった。多くの学生が参加しているが、勉強に差し支えないか心配で周囲の人にたずねると、「体力的にも、精神的にも鍛錬になるので、問題ない」という返事が一様に返ってきた。ただ、「一部のエリート校の学生は参加しない」という返事もあった。

今年の「アリラン」は、以前に観たものと異なり、大人の参加者が増え、アクロバットを披露するプロの演技など、芸術公演の色彩が強くなっていた。ストーリーは北朝鮮の



写真 2 畜産の振興



写真 1 平壤市内の建国60周年を祝う看板



写真 3 「種子革命」



写真 4 「21世紀は情報産業の時代」



写真 5 「自主、平和、親善」

近代史から始まり、現在の政策、今後の北朝鮮の姿を予想させるものと進んでいく。

今年の「アリラン」でも、経済政策の表現が多く、写真2～4のように、農業や軽工業の振興、情報産業、科学技術水準の向上、人民経済の現代化など、このところ『労働新聞』など北朝鮮のメディアで強調されている政策が表現されていた。また、写真5のように経済政策の紹介の最後の場面で「自主、平和、親善」という、1992年の憲法改正でプロレタリア国際主義にかわって用いられるようになった外交方針が出てきた。北朝鮮の人々が、近未来の祖国が、日米を含む世界各国との関係正常化をなしとげ、平和裡に共存するなかで経済発展へ邁進していく姿を望んでいることを感じた。

今回の滞在期間中見た平壤は、普段とは異なり、ずいぶんとのんびりした雰囲気だった。食堂で楽しそうに外食する家族連れの姿や、街中をのんびり散歩する人々を見ると、日本も北朝鮮も人間の生活が行われている場としては、それほど大きく変わらない一面があることを感じた。一日も早く、お互いがふつうの人間の心を持って、肩肘張らずに交流できる日が来るようになってほしいと思った。